



ドイツ連邦共和国大使館 東京
Botschaft der
Bundesrepublik Deutschland Tokyo

ドイツ連邦共和国大使館 建物と庭園

日独交流史の一側面





1861年（文久元年）1月24日、プロイセン使節フリードリヒ・アルブレヒト・ツー・オイレンブルク伯爵と江戸幕府の間で「修好通商航海条約」が結ばれ、ドイツと日本の国交が始まりました。日独両国間では、学術・文化分野を中心に今日まで活発な交流が続いてきています。この条約はその礎石を築くとともに、両国が恩恵を享受する経済分野、政治分野の緊密な関係の発展を可能ならしめました。

在日ドイツ大使館事務棟や大使公邸、そして公邸の美しい庭園は、両国の緊密な関係を映し出しています。本冊子をご覧ください、大使館施設と日独関係の過去と現在に思いを馳せていただければ幸いです。

ドイツ連邦共和国大使館職員一同

表紙写真：
大使公邸正門脇の立石
「不老門」とある

「一に土筆が岡と称す、もと摘草及虫の名所にして、又枯野を以て知らる。次第に旧観を失ふものありと雖も、尚は茅花風に飜へり、清流原野を縫ふの景趣を存し、宛然古武蔵野を髣髴せしむ」

(この野原はつくしが丘とも呼ばれている。昔は若菜を摘み、虫の音をきくための名所だった。その後、風景は次第に昔の特色を失ってしまったが、しかし今でもいろいろな草花が咲き、小川が流れる野原となっていて、訪れる者に古い武蔵野の面影を忍ばせるに十分である)

これは、1907年(明治40年)発行の旅行案内書「東京案内」における記述です。広尾一带は、当時なお野趣に富む美しさがあったことがわかります。行楽地としても人気があったのでしょう。麻布は今も東京の中では緑が多く、多数の国が大使館を構える地域であるとともに、歴史や伝統と現代的な建築が混在する地域です。

今日、ドイツ大使館の事務棟、大使公邸並びに庭園がある敷地は、地形からみると武蔵野台地の先端部に位置し、公邸から南の部分は急斜面となっています。かつては、現在公邸が立っているあたりから遠く海まで視界が開け、見晴らしがききました。

周辺の発掘により、このあたりはすでに縄文時代、人が住んでいたことがわかっています。また、海面は今よりかなり高く、集落のすぐそばまで海岸線が来ていたようです。

この一带はその後何世紀もかけ発展していきました。「あざぶ」という地名が

最初に登場したのは1559年(永禄2年)(訳注 小田原北条氏家士の所領高が記載された「小田原衆所領役帳」における「阿佐布」の記述)ですが、江戸期に入りしばらくすると「麻布」という字が定着しました。「麻布」の使用は、1713年(正徳4年)、一带が「町方」に指定され町奉行の管理下に置かれて以降であるとの記載が「文政町方書上」にあります。漢字については、「麻の布地」の生産が盛んであったからであろうとの推測が有力です。なお、現在の大使館の所在地がある一带は、1967年(昭和42年)の新住居表示による町名変更までは「麻布広尾町」でした。

今日の大使館にあたる場所とその周辺が掲載された江戸の地図で最も古いものは、1644年(正保元年)頃の「正保年間江戸絵図」です。この絵図では現在の大使館敷地の南方一带の斜面の場所に「お薬種島」との記載があります。これは、「麻布御薬園」(麻布南植物園)のことで、1644年(正保元年)には、三代將軍徳川家光(1604年～1651年)も来遊しています。この御薬園の付近に、五代將軍綱吉(1646年～1709年)は1698年(元禄11年)4月、別荘「白銀御殿」を造営させます。富士山が望めたことから「富士見御殿」とも呼ばれていました。御殿造営にあたっては、建築資材を海路から溯及し直接崖下まで運搬できるようにと古川を開掘させる手間までかけたのですが、1708年(宝永5年)には閉鎖されてしまいます。同時期、やはり綱吉の別邸となっていた「白山御殿」



内に御薬園も移設されますが、これが今日の小石川植物園の前身となります。

江戸時代を通じ幕府は、大名屋敷や藩士の宿舍等の用地として各藩に土地を与えたり、その後に屋敷替えを行ったりしましたが、そうした武家地は次第に江戸城から離れた郊外にも多数設けられていったため、農村・農地面積の縮小と江戸の発展拡大・都市化が進んでいきました。大使館敷地・周辺一帯も、こうした過程を経てきました。1708年（宝永5年）から1848年（寛延元年）にかけて、現在の大使館敷地の北半分は酒井氏の

名義でしたが、南半分は三枝氏、酒井氏、小池氏と所有が変わっていきました。明治時代（1868年～1912年）に入ると、1880年代の一時期、この場所には海軍の懲罰施設「海軍囚獄処」が置かれていたことが当時の地図から分かります。

大正時代（1912年～1926年）には、政治家で政友会の重鎮の小泉策太郎（1872年～1937年）が現在の大使館が建っている敷地に、接客用の洋館と居住用の和館から成る邸宅を建て、庭園を築きました。文人としても有名であった小泉（雅号は三申）は、熱心な古美術収集家でもあり、その収集品の一部を庭園内に配しました。

その後、小泉の没後の1937年（昭和12年）からは、日本タイプライター会社の創設者で衆議院議員の桜井兵五郎（1880年～1951年）が第二次世界大戦の終戦時までここに邸宅を構えました。終戦後不動産は康楽寺に委ねられ、一時期は中国大使館の施設としても利用されていました。



接客用の洋館に立つ小泉策太郎



麴町永田町に開設されたドイツ公使館(1870年代半ば) / 麴町永田町のドイツ公使館建物(1880年代はじめ)

ドイツ大使館は今日の場所に拠点を置くまで、複数回にわたり移転を繰り返してきました。

プロイセンが最初の常駐使節として派遣したマックス・アウグスト・スキピオ・フォン・ブラント(1835年～1920年)は、まず1862年(文久2年)、横浜に領事館を開設しました。その4年後、ブラントは横浜の公館を麻布の春桃院という寺院(現在の南麻布3-18-8)に移します。麻布・芝界限には、幕末期、来日した外国使節のため幕府が滞在用あるいは公館用に指定した寺院等が複数ありました。

その後、ドイツの使節団は、1872年(明治5年)から1945年(昭和20年)にかけて、麴町区永田町に公使館(1906年以降は大使館)建物を構えます。ここは、国会議事堂に隣接する皇居からも近い敷地でしたが、1945年(昭和20年)5月の空襲で大使館は焼失し、戦後は、他のドイツ関連資産と同様大使館の土地も

GHQの接収対象となりました。今日、国会議事堂の隣にあるこの場所には国会図書館がたっています。

第二次大戦後、1949年(昭和24年)のドイツ連邦共和国創設によりドイツが新たなスタートを切り、日本も1952年(昭和27年)のサンフランシスコ講和条約により主権を回復したことから、日独両国の国交再開の条件が整いました。まず、大阪神戸総領事館、東京の大使館勤務経験をもつヴォルフガング・ガリンスキー率いるチームが帝国ホテルの一



麴町永田町の大使邸(第二次世界大戦開戦前)

室で大使館設置に向けた準備を進め、ほどなくハインリッヒ・ノルテ参事官・臨時代理大使率いる「在外事務所」が業務を開始し、同年、同事務所は「大使館」に昇格されました。戦後最初の駐日大使に任命されたのはハンス・クロールで、着任は1955年（昭和30年）でした⁽¹⁾。しかし、永田町の元大使館所在地を再び利用することはできませんでした。それゆえ1952年（昭和27年）から1960年（昭和35年）にかけての大使館の所在地は麻布東鳥居坂町（現在の六本木5丁目）でした。

1954年（昭和29年）になると、日本政府から、言わば戦前のドイツ大使館敷地に対する一種の代替地として、今日の港区南麻布の土地を1円という名目的な価格で取得することについて打診さ

れました⁽²⁾。当時この土地には中華民国（台湾）大使館の官舎がたっていました。

日本政府の打診があった2年後、面積約14,500平米の敷地に大使館事務棟と大使公邸を建設する作業がスタートしました。事務棟も公邸も、現代建築の粋を集めたものでした。大使公邸はRC構造で連邦建設局（BBD）ボン本部と松田平田設計事務所が設計・施工しました。事務棟は連邦建設局（BBD）ベルリン本部（現連邦建設国土庁（BBR））によるものです。竣工・入居は大使公邸が1957年、事務棟は1960年でした。事務棟内部の吹き抜けの階段室には、1階から最上階にまで達する南向き全面にガラスブロックの部材をふんだんに使った明かり取りが設けられていました。ルーフ部分の軽やかな反り屋根は西洋的な機能主義と東洋的建築意匠の伝統の組み合わせを表現していました。

(1) 日本は1973年、ドイツ民主共和国（東独）とも国交を樹立。

(2) ドイツ連邦共和国取得前の明治期から戦後にいたる土地の所有権移転の詳細な歴史的経緯は不明。なお、大使館敷地の現在の官舎部分には当時他の所有者が権利を有する「飛び地」があり、後年これを取得した際には90万マルクが支払われている



今日と同じ敷地に立つ大使館旧事務棟（左）と大使公邸（右）（1960年代）



新事務棟アトリウム

1995年の阪神淡路大震災後、大使館事務棟と大使公邸の耐震性検査が行われ、事務棟は新築が必要であるとの結果が出されました。旧事務棟建物が特徴とした1950年代建築デザインの記憶をとどめるため、ヘディア・フレーゼ＝ルックハルトの壁面モザイクアート作品を残すことにしました。同作品は現在新事務棟の会議室の壁面を飾っています。

新事務棟の基本設計選定にあたっては、国際コンペが実施されました。その結果、5階建てキューブ型（箱形）の建物を提案したマーラー・ギンスター・フクス設計事務所が当選しました。坂道から少し奥に入った場所に配置されたことで、シンプルさ、新しさが際立っており、軽やかでありつつも時代に流されない魅力を発しています。開放的で透明性が高い一方で、質実剛健なデザインでもあります。

事務棟建物内部に入ると、面積約200平米のアトリウム（吹き抜け）があり

ます。アシンメトリックでランダムな開口部をもつ回廊が周囲を囲み、トップライトからの自然光が1階まで差し込んできます。耐震性に配慮したキューブ型の建物は、建物重量を垂直方向に均等に分散させ、アトリウムの壁には十分な耐震性が考慮されています。また、地震のあらゆる方向の横揺れ等に対応できるよう、壁をはじめとする構造体が配置されています。



南部坂からのぞむ新事務棟



ドイツ大使館は、建物と並んで庭園にも誇りを抱いています。現在の庭園は、小泉策太郎邸時代の庭園を、1960年代、戦後日本の造園界をリードした一人である飯田十基（1890年～1977年）の設計・監督のもと、大使公邸としての用途にあわせ改修したものであり、1969年（昭和44年）に飯田は、この庭園改修等の造園設計で日本造園学会賞を受賞しています。1963年（昭和38年）には、当時ドイツ連邦共和国国家元首として初訪日を行ったハインリッヒ・リュプケ大統領が、天皇皇后両陛下をここにお迎えしました。

花をつける灌木や樹木の配置は、石や水などの添景との調和を考え工夫されています。庭園のももとの構成や当時調達された設備・造作、彫像や碑など石材彫刻に大きな変更は加えられなかったので、小泉策太郎が20世紀初頭に作らせた庭の特徴もほぼそのまま残されていると言ってよいでしょう。

前述のとおり、政治家・小泉策太郎は文人としてもその名が高く、京都をはじめ主に関西地方において多数の古美術品の収集も行っており、その一部を庭園にも配しました。その中で最初に訪れる人を迎えるのが、正門脇の「不老門」と刻まれた人の背丈ほどの立て石です（表

紙写真参照)。「不老門」とはもともと、平安京大内裏の豊楽院に設けられていた門の一つです。豊楽院が、朝廷における娯楽、芸能、饗宴の場であったことに鑑み、今日の「公邸」の用途に照らしてみますと、「不老門」の立石もあながち的外れとは言えないかもしれません。また、道教の不老長生を求める神仙思想も、ほぼ三年ごとに新しく交代する大使が居る場にふさわしいかもしれません。

庭園の東側には、朱塗りの武家門が建っています。門の屋根には厄除け、魔除けとして鬼と獅子が配されています。この武家門も小泉策太郎が移設させたものですが、その由来は明らかではありません。



武家門

武家門から、少し離れた庭園の南側、公邸建物から見て正面の部分には四阿(あずまや)があります。この建物は小泉策太郎が築かせたもので、建てられたのは第一次世界大戦が終了したあとの時期だと思われます。庇の下は自然な湾曲をみせる四本の捨て柱があり、建物は極めて小ぶりですが、この土庇(どびさし)をはじめとして数寄屋造りの特徴が随所に見てとれます。茶室建築はそもそも一般的に、来客の注意がお茶に向けられるように簡素さを旨としています。この建物は、元來待合としての機能をもつ四阿でした。かつて小さな茶室が棟続きに設けられていましたが、来客は招じ入れられる前にここで小憩をとり、庭園の眺めを楽しんだのです。茶室のほうはすでに従前より失われていましたが、残

された四阿のほうも近年痛みが激しい状態になっていました。そこで裏千家千玄室大宗匠の手により、2011年の日独交流150周年にちなむかたちで四阿の全面改修工事が実現されました。改修にあたっては、斬新な趣向が凝らされました。四阿の内部にお茶を点てる手前座が設けられたのです。これにより、お客様には庭園の眺めを楽しんでいただきつつお茶を召し上がっていただくことができるようになりました。この建物は、文化庁の所見において「文化財建造物として近代和風建築の範疇に含まれるものである」とされています。同所見は、「麻布地域の郷土史の観点からみて貴重な」庭園の「歴史的価値が継承され



四阿 (あずまや)



るよう」、「園内に点在する(中略)建造物群も含めて」「適切な維持管理に努めることが望まれる」としています。

四阿の向かいには、中国か朝鮮半島に由来すると思われる石碑が立っています。紀元6世紀にインドから中国に禅を伝えたと言われる菩提達磨の像が彫り込まれたものです。達磨大師が長江(揚子江)を葦葉にのって渡ったという故事は禅宗で好んで詠まれ、描かれる題材です。像にはその渡河の様子が描かれています、その隣に七言絶句が彫られています。

大明嘉靖二十二年二月吉日
少林祿寺住山・立石

冲塵書

長江何事浮神僧
北渡慈航薦大乘
欲覓此心看折葦
旃檀好供瀆嚴楞

題折葦渡江

徹王施賤
錦屏書士李仲昇

徽王寄贈
錦屏書士李仲昇 画

長江はなぜ神僧を波間に浮かべるのか

僧が慈悲の心から北方へと航行し
大乘の教えを広めるためである

その心中を推し量ろうとするならば
葦を折ったことを看ればよい

貴重な旃檀の供え物では
楞嚴経(りょうごんきょう)⁽³⁾の教えの
冒涇になるばかりである

冲塵 書

大明嘉靖二十二年二月吉日
少林祿寺の山中に住むXX⁽⁴⁾により建立

達磨大師の石碑からほど近い場所に
二体の石像が立っています。文人像で、
石碑と同様朝鮮半島もしくは中国の
ものを、小泉策太郎が買い求め庭園に配
したものだと思われます。

(3) 「楞嚴経」または「首楞嚴経」は大乗仏教初期の經典で、
教禅一致を説く。

(4) 名は判読不能





四阿や文人像のあるあたりにはまた、庭園内に複数ある蹲踞（つくばい）のうち二つが配され、石灯籠も置かれています。日本の庭園建築の例にもれず、庭園全体についても大小様々な石と流れ・池の配置や調和が重視されており、複数の石灯籠と深さ19メートルにも及ぶ井戸に加え、小さな流れへと水が注ぐ水鉢も五カ所あり、幾筋もの流れは、四阿の手前で交わっています。

庭園正面部分には、蓮座に座す大日如来の石仏があり、そのすぐ後方には十三重石塔がたっています。両者ともに朝鮮半島もしくは中国に由来するものと思

われます。小泉策太郎が庭園を造らせた当時からすでにあった唯一のものと思われるのが、敷地西南奥にたつ稲荷の祠です。江戸では五穀豊穰・商売繁盛の稲荷神をまつる邸内社が数多く見られました。

かつて大使館の依頼を受け調査研究を行った郷土史家の報告では、この祠も、江戸初期に建造されたものと推測されるとのことで、当時前述の幕府の御薬園内に伏見稲荷を地守神として勧請したものであろうとのことです。その後17世紀末に綱吉の「白銀御殿」が造営されると、御殿の鎮守として信仰されましたが、御殿が取り壊され跡地一帯が複数の区画に分割されると、それらの土地を屋敷として拝領した旗本・御家人が氏子となったようです。この間、稲荷祠は何





稲荷祠が写った古い写真



今日の稲荷祠

度かこの辺り一帯の範囲内でその場所を移されたと推測されています。江戸期は実に多くの祠が建てられ、その多くが地図には記載されていませんでした。しかし、好天に恵まれれば遠く富士の眺望を望むことができ「富士見稲荷」と呼ばれるようになったこの祠は、名所として知られる存在であったようです。時が下り、小泉策太郎邸でなくなった時期には、祭祀を行うことはなくなっており、神像も、祠から他に移されることとなりました。

庭園内の最も興味深いものの一つとして、もう一つ古い鐘楼を挙げることができます。もともとは奈良にあり、京都周辺の三条村「瓦屋吉右門」により造られ、東山天皇代元禄16年(1703年)に奉納されたものとの記録があります。明治期の廃仏毀釈で顧みられなくなったものを、小泉策太郎が入手し移設しました。

当時の梵鐘は、第二次世界大戦時、

武器製造のための金属類回収令で供出され、鑄潰されてしまいました。現在の鐘は、発動機メーカーの創業者山岡孫吉氏により「日独友好親善之鐘」として寄贈されたものです。1958年(昭和33年)、重要無形文化財保持者(人間国宝)の鑄金工芸作家香取正彦氏により制作され、翌年山岡氏により贈られました。山岡氏はディーゼルエンジンの改良、製造により大きな成功を達成した山岡発動機製作所(のちのヤママーディーゼル)の創業者ですが、ディーゼルエンジンの発明者オイゲン・ディーゼルの親族が決して特許使用料を要求することがなかったことなど、ドイツとの縁を感じられたのです。鐘の表面には、「日独友好親善之鐘」の文字と並び、日本語で「美しい世界は感謝の心から 昭和三十四年七月山岡孫吉」と、またドイツ語では「DIE TÖNE VERHALLEN, ABER DIE HARMONIE BLEIBT GOETHE」とゲーテの言葉(「響きは消えても調和は残る」



(「箴言と省察」より)) が刻まれています。

以上のように、大使館庭園は日独関係を象徴する存在といえ、ドイツ連邦共和国首相の初訪日となった1960年(昭和35年)春のコンラート・アデナウアー首相の訪問や、ドイツ大統領の初訪日となった1963年(昭和38年)のハイน์リッヒ・リュブケ大統領の訪問等、日独交流の歴史的場面の舞台ともなってきました。

また近年は、公邸における演奏会等の機会に、皇后陛下や皇太子殿下をお迎えています。2011年(平成23年)には、日独交流150周年名誉総裁としてクリスティアン・ヴルフ大統領並びに皇太子殿下のご臨席を賜り記念行事を催すなど、150周年主要行事の会場ともなりました。日独交流150周年では、1000件以上の様々な行事が日本全国で成功裏に実施されました。

大使館、大使公邸、庭園は、日常的な大使館業務の場であるにとどまらず、その歴史、文化的価値、またその風格と趣

により、地位や立場を問わず日独両国民が交流をはぐくむ、多数の人々が友情を築き培う特別な舞台であり続けてきました。そして、この友情こそ長年、日独関係の礎であり続けてきたものなのです。

(文中、敬称は省略させていただきました)

2013年3月発行

発行

在日ドイツ連邦共和国大使館

編集

フォルカー・シュタンツェル

ドロテア・ブレドノウ

ドロテア・ドウルトウヤ

リサ・ゲオルギオウ

磯部 鎮雄

古池 好

窪田 孝司

トム・デ・ラール

アレクサンダー・ペーラー

俵 元昭

ニナ・ヴィチョレック

エファ・ツインマーマン

翻訳

田口 絵美

写真

© 在日ドイツ連邦共和国大使館

小泉家関係者による写真等のご提供及びご協力に
感謝申し上げます



ドイツ連邦共和国大使館 東京
Botschaft der
Bundesrepublik Deutschland Tokyo

www.japan.diplo.de